

# 日本社会福祉学会 関東部会

## NEWS LETTER vol.18

Kanto branch, Japanese Society for the Study of Social Welfare

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20 東洋大学 社会学部 社会福祉学科 高山直樹研究室 気付  
日本社会福祉学会関東地域部会事務局 Eメール:kantobukaijimukyoku@gmail.com  
2014年 12月24日 発行

### 巻頭言 研究と実践をつなぐ連携を強化する関東部会

高山 直樹 (関東部会担当理事：東洋大学)

2014年度より、大島巖理事(日本社会事業大学)から引き継ぎ、関東部会担当理事となりました東洋大学の高山です。関東部会のこれまでの活動のさらなる発展のために、研究と実践のつながりを強化していく所存であります。どうぞよろしくお願いいたします。

一般社団法人日本社会福祉学会・関東地域ブロック部会(略称：関東部会)は、一般社団法人日本社会福祉学会の地域ブロック支部の一つで、関東地域ブロックに所属する会員によって構成されています。現在関東部会は、1800名強の会員から組織されているもっとも会員数の多い部会です。

関東地域ブロックは、各種学会・研究会の開催が多い地域であることから、一般的な研究・研修・研究交流の機会の提供というよりは、特に大学院生など社会福祉学研究に取り組み始めた者や、さらなる報告機会を求めている研究者や実践家の研究活動の活性化と研究交流の促進に焦点を当てて部会活動を行っています。

主な活動としては、研究大会があります。今年度は2015年3月15日(日)東洋大学白山キャンパスにおいて開催されます。大会テーマは、「社会福祉学研究と実践の新たな枠組み—ソーシャルアクションを志向する研究・実践に求められるもの—」と決定いたしました。

ここ数年、震災関連テーマを含め、社会福祉学からの「発信力」を高めるための有効な研究方法論のあり方を取り上げてきました。今年度は、この流れを踏まえ、我が国の研究・実践の方向性に不可欠なソーシャルアクションを取り上げます。このソーシャルアクションは、我が国において、いまだ研究や実践に根付いていない現状があります。そこで、ソーシャルアクションの枠組みを議論し、ソーシャルアクションを志向する意味について確認していきたいと考えます。

また今年度の日本社会福祉学会奨励賞受賞者は、単著書部門においては、高瀬幸子氏(帝京平成大学)による「在宅高齢者へのソーシャルワーク実践：混合研究法による地域包括支援センターの実践の分析」、論文部門においては、上村勇夫氏(日本社会事業大学実習教育研究・研修センター)「知的障害者と共に働く特例子会社の一般従業員の支援実態と困難感」の関東部会会員が受賞されました。大会ではお二人の受賞者の記念講演があります。

さらに2013年度の研究大会から、自由研究報告演題を対象に「研究大会奨励賞」が創設されました。若手研究者・実践家の会員を中心に、研究大会の自由研究報告に積極的にご応募いただきたくお願いいたします。

機関誌としては、『社会福祉学評論』を電子ジャーナルとして発行しています。投稿時期は随時であり、2名の査読委員による教育的な査読の結果、掲載可となれば、速やかに電子ジャーナル上で公開されます。掲載された論文は、データベースに登録されます。

上記活動に加えて、ニューズレターの発行、関東地域ブロックで行われる公開講座・講演会、博士論文公開審査、最終講義等の情報提供、社会福祉学専攻協議会大学院生協議会との連携活動を行っています。

このように関東部会はこれまで若手研究者・実践家の研究活動の活性化と研究交流の促進を旨とした活動を進めていきます。会員の皆さまに積極的にご参加、ご関与いただき、部会活動をさらに活性化して参りたいと思います。ご支援・ご協力・ご関与のほどよろしくお願い申し上げます。

## 2013年度の研究大会を終えて

贅川 信幸 (日本社会事業大学)

「社会福祉学からの『発信力』(その2)～社会にインパクトを与える社会福祉学研究とその方法論～」を大会テーマに、2013年度日本社会福祉学会関東部会研究大会(大会長:大島巖[日本社会事業大学学長・教授])が、2014年3月1日に日本社会事業大学清瀬キャンパスにて開催されました。朝から冷たい雨が降るなか115名の方にご参加頂き、皆さまのご尽力のもと、盛会のうちに終えることができました。

午前の自由研究報告は、研究報告19題、萌芽的研究報告7題、実践報告4題と、合計30演題が11会場に分かれて行われました。本大会の自由研究報告で特筆すべき点として、創設して初めてとなる関東部会研究大会奨励賞が決定したことが挙げられます。受賞したのは、松本望氏(日本社会事業大学大学院博士後期課程)の「施設内虐待の発生メカニズムの解明に向けたモデル構築～スイスチーズモデルの援用可能性とその課題」でした。福祉課題を抱える人たちの入所施設における虐待という課題に焦点をあて、鋭く幅広く柔軟な視点で既存モデルを分析し、また、代用モデルを当てはめるにとどまらず、そのモデルにおける課題を分析し課題克服の方策をも検討する誠実な視点が、若手研究者として高く評価されました。

午後はまず、日本社会福祉学会で学会学術賞を受賞された小原真知子氏(東海大学)に「要介護高齢者の退院援助に有効なアセスメント法の開発とその活用～社会にインパクトを与える研究方法論の視点から～」のテーマのもとに記念講演をいただきました。社会福祉実践現場における関心を、学術的意義を明確にすることによって研究枠組みに乗せる過程、科学性が求められる研究において「量的-質的」の2極的論点を超えて目的と関心に合わせた柔軟な方法構築の過程、成果を実践・制度に還元することを見据えた研究の過程という、研究全般における過程を詳細に紹介頂きました。この過程はまさに、本大会のテーマに多大な示唆を頂けるものでした。

午後の第2ラウンドは大会テーマの副題をメインテーマに掲げたシンポジウムが行われました。4名のシンポジストから、社会福祉学の対象となる課題・領域において、研究手法とそれが実践現場や社会にどうインパクトを与えうるかを、プレゼンテーションを頂き、議論しました。詳細は紙面の都合上触れることが叶いませんが、福祉ニーズを解決するための社会変革、制度構築、方法論を、いかに科学的に、根拠を持って構築してゆくかの方向性に示唆を得るものとなりました。

最後になりますが、こうして盛会のうちに大会を終えることができましたのは、関東部会運営委員の先生方、なかでも多大なるバックアップを頂きました研究担当委員の先生方のご尽力、大会全般を通して機敏に動いて下さった、大正大学、東洋大学、日本社会事業大学の学生・院生アルバイトの皆さまのご協力お陰です。ここに厚くお礼申し上げます。

## 2013年度 研究大会奨励賞のご報告

関東地域ブロック研究大会奨励賞は2012度の大会時に創設されましたが、創設初年度は該当者なしという結果でした。

そして2013年度は、研究大会が行われた同日に選考委員会が開催され、その結果、初めての関東地域ブロック研究大会奨励賞受賞者が決定されました。

研究大会当日は、最後のプログラムで大島巖選考委員長より受賞者が発表され、表彰状の授与と副賞が贈呈されました。

今号では、奨励賞受賞者から受賞した感想等をいただきましたので、ご覧ください。

★受賞者 日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科 博士後期課程 松本 望氏

★学会報告テーマ 「施設内虐待のメカニズム解明に向けたモデル構築 ～スイスチーズモデルの援用可能性とその課題～」

私は現在、大学院にて施設内虐待の予防をテーマに研究をしています。研究大会では、組織事故の理論モデルである「スイスチーズモデル」を、施設内虐待のモデルとして援用できないかと考え、その可能性と課題に関する発表をいたしました。

そもそも奨励賞に応募をした理由は、この組織事故のモデルを施設内虐待に援用するという点に関して、厳しい指摘を受けることが多く、自信を失いかけていたことが挙げられます。そして研究大会での発表を通じて多くの先生方からご意見をいただくとともに、このモデルの有用性を確かめたかった、というのが正直な理由です。

実際に、発表した際にいただいた多くの貴重なご意見は、その後の研究にも大いに“活かす”ことができましたし、奨励賞をいただいたことは私にとって大きな励み・自信となりました。また当時、私はアンケート調査に取り組んでいたため、いただいた「副賞」で切手や封筒をたくさん購入するなど、そちらも大いに研究に“活かす”ことができました。

最後になりましたが、このような貴重な機会をいただきましたこと、そして賞の選考や学会の運営等に関わる全ての皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

2014年度

## 関東地域ブロック 研究大会の お知らせ

大会テーマ：

### 社会福祉学研究と実践の新たな枠組み

～ソーシャルアクションを志向する研究・実践に求められるもの～

■日時：平成27（2015）年3月15日（日）

■会場：東洋大学白山キャンパス

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

・都営地下鉄三田線白山駅 「正門・南門」A3出口より徒歩5分

「西門」A1出口より徒歩5分

・東京メトロ南北線本駒込駅 「正門・南門」1番出口より徒歩5分

・都営地下鉄三田線「千石」駅 A1出口から「正門・西門」徒歩7分

東洋大学ホームページで確認して下さい

■参加費：無料（会員・非会員いずれも無料です）

■実行委員長：高山直樹（東洋大学） 大会事務局長：丸山晃（東洋大学）

申し込み：以下のサイトから申し込みができます

<http://www.jsssw-kanto.jp/>

関東地域ブロックは、特に大学院生など社会福祉学研究に取り組み始めた方や、さらなる報告機会を求めている研究者や実践家の研究活動の活性化と研究交流の促進に焦点を当てた部会活動を行っています。

その主たる活動として研究大会があり、今年度は東洋大学白山キャンパスにおいて開催します。大会プログラムは、「記念講演」として、今年度の日本社会福祉学会学会賞において、関東部会に所属する2名の会員が奨励賞を受賞されました。その栄誉を称えるとともに研究のさらなる発展を期待して、その成果を発表していただきます。

「シンポジウム」では、「社会福祉学研究と実践の新たな枠組み～ソーシャルアクションを志向する研究・実践に求められるもの～」のテーマのもと、ソーシャルアクションを意識しながら社会福祉学研究と実践をどう関連付け、社会問題の解決としての方法論を政策的にどうつなげていくか、そして、ソーシャルアクションを起こさせるような研究とは何かということを探求します。

このテーマに至る背景には、ソーシャルアクションの低下、ソーシャルアクションの方向性を失った社会福祉の研究あるいは実践の問題性が非常に大きくなっており、社会福祉問題の解決に向けた社会福祉学研究とその方法論が問われていることがあります。

実践あつての社会福祉学の研究があることを再認識し、社会福祉におけるソーシャルアクションの枠組みの設計を出発点とする議論といった挑戦的な内容を予定しています。

実践やニーズに根差したソーシャルアクション、ソーシャルアクションの価値や課題、ソーシャルアクションを社会福祉学的にどう展開するのか等を改めて検討する機会にしたいと考えています。

#### ■大会プログラム

時間	内容
9:00 - 9:30	受付
9:30 - 12:00	自由研究報告

時間	内容
12:00-13:00	昼食・休憩(第4回関東部会運営委員会)
13:00-14:00	記念講演(奨励賞受賞者) (単著書部門)「在宅高齢者へのソーシャルワーク実践:混合研究法による地域包括支援センターの実践の分析」 高瀬 幸子氏(帝京平成大学大学院)  (論文部門)「知的障害者と共に働く特例子会社の一般従業員の支援実態と困難感」 上村 勇夫氏(日本社会事業大学実習教育研究・研修センター)
14:00-17:00	基調報告 (仮題)「社会福祉学研究と実践の新たな枠組み -ソーシャルアクションを志向する研究・実践に求められるもの-」 室田 信一氏(首都大学東京)  シンポジウム 「社会福祉学研究と実践の新たな枠組み -ソーシャルアクションを志向する研究・実践に求められるもの-」 シンポジスト 室田 信一氏(首都大学東京) シンポジスト 高良 麻子氏(東京学芸大学) シンポジスト 佐久間 裕章氏(NPO法人ふるさと会の理事長) コメンテーター 森田 明美氏(東洋大学) コーディネーター 高山 直樹氏(東洋大学)
17:00-17:30	総会・関東部会研究大会奨励賞授与式
17:30	閉会
18:00-20:00	懇親会(参加申込者)

## 運営委員に就任して ~日本社会福祉学会関東部会に寄せる期待~ I

榎原 美樹(明治学院大学)

本年度より、前任の深谷美枝委員に代わり運営委員として参加させていただくことになりました。私自身はまだまだ若手研究者のつもりでいましたので、「若手研究者・実践家の研究活動の活性化と研究交流の促進」を目的とした関東部会の運営に携わらせていただくことには、正直なところ戸惑いもありましたが、若手(に近い者)ならではの視点、役割もあると考え、微力ながら精一杯努めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

なお、運営委員会の中の役割として、機関誌の編集委員を担当しております。機関誌『社会福祉評論』は電子ジャーナルであり、関東部会のホームページを通じて、フルテキストで一般公開されています。電子ジャーナルでの論文は、全世界にむけて開かれており、検索性にも優れているため、引用が多くなるとも聞きます。査読付きの業績になりますので、ぜひ積極的にご投稿いただければと思います。

ところで先日大学の授業の中で、ベルタランフィのシステム理論について学生と具体例をあげながら演習をしている際に、この関東部会もひとつのシステムとして考えることができることに思いいたりしました。運営委員会も当然システムとして機能し動いてきていますし、関東部会自体も、ひとつの大きなシステムとして見ることができます。そして、この会報紙が届いた皆様は、関東部会の会員であり、システムを構成する一員ということになります。

システムは、皆が関心を持たず、インプットがなければ、乱雑になり、崩壊してしまうと言われていました。一方で、システムはインプットに応じて、変化し、成長していく可能性をもつものであり、関東部会もその可能性を大いに持つことを、この間実感しております。私自身も運営委員として積極的なインプットに努めていきたいと思ひますし、ぜひ皆様にも、研究大会への参加や機関誌への投稿、部会運営に対するご意見など、様々な形でインプットをしていただき、共に関東部会を盛り上げていただければ幸いです。

## 運営委員に就任して ～日本社会福祉学会関東部会に寄せる期待～ II

山口 麻衣 (ルーテル学院大学)

長期にわたって関東部会でご尽力いただいた福山和女委員の後任として、本年度より関東部会の運営委員として、関東部会の論文集の編集を中心に担当させていただくことになりました。実は10年ほど前に大学院生であった私は、関東部会の研究会に参加し、関東部会の論文集に論文を掲載していただき、とても嬉しく思いました。当時の関東部会の担当校が今の私の本務校であることもあり、研究のスタートを支えてくださったことに特別の感謝の思いがあります。その頃は、論文掲載後の次号に論文の論評を書いていただいております、適切なお助言と暖かい励ましに改めてしっかり研究しなければという気持ちを抱きました。

当時の論文集は電子化されておらず、購入したい人だけが論文集を買うシステムだったため、あまり多くの人には読んでいただけないものではないかと感じておりました。今はバックナンバーも含めて電子ジャーナルとなり、関東部会が時代の変化を先取りしながら、発信力を高め、大きく発展していることを実感します。同時に、実践と研究の架け橋となるように働きかけ、若手研究者を育成する役割を果たすという使命は変わることなく受け継がれていることを確信します。関東部会の運営委員会で次回の大会のテーマや投稿論文を増やす方策などについて熱心に議論をしている場に参加させていただき、若手育成や社会福祉の発展のために、長年にわたって陰ながら熱い思いで取り組んでいただけてきたことに気付きました。育てていただいた関東部会に今度は委員としてかかわらせていただくことができ、大変光栄に思っております。

社会福祉の実践と研究を繋ぐことの重要性は従来から指摘されてきましたが、多様な社会的なニーズに取り組む必要のある今日、ますますその重要性が高まっているといえるでしょう。実践の世界と研究の世界が分断されているのではなく、融合化し、調和していかなければ実践に役立つ研究成果を得ることは難しい時代といえます。ソーシャルワーカー自身が実践しながら研究し、研究の成果を実践に活かせるよう、研究者が社会福祉実践に役立つ研究を行い、実践に還元できるよう、関東部会の取り組みが、将来を見据えて種をまき、プラットフォームを作る働きかけになることを期待します。私自身としては少しでも恩返しができるよう、次の世代へ大事なバトンを渡せるよう、微力ながら努めたい所存です。どうぞよろしく申し上げます

## 運営委員に就任して ～日本社会福祉学会関東部会に寄せる期待～ III

岡田 哲郎 (立教大学)

前任の芝田英昭委員より引き継ぎ、今年度第2回目の委員会から参加させていただいております。役割は広報を担当し、委員の先生方に教えをいただきながら、部会活動の充実に努めて参りたいと思ひます。

さて、本部会に寄せる期待ですが、運営委員会の議論でも率直に感じるのは、ひとつに、若手研究者・実践者

の育成に力が入られていることと、もうひとつに、研究と実践の間に社会福祉学の新たな可能性を見出しているという姿勢です。前者は自分自身が駆け出しの若手ですので、正直、このような手厚い部会活動の支援があることを十分に知らなかったことがもったいなく、そんな実感も含め、当事者の観点から情報発信をしていけることと思います。一方、後者について、現実には「研究者」や「実践者」という部分的立場をも超えて、ひとりの生活者としてどう生きるのかを問うているように思います。

経済成長を前提として矛盾を深めてきた市場経済の限界、その仕組みに付随して、接ぎ木的に構築してきた社会保障制度の限界、いわば、近代システムの限界を目の当たりにしているようです。東日本大震災からの復興という長期的課題も抱えながら、私たちは、緩やかに進行する非常事態の渦中にいるのかもしれませんが。そうした現実と自らの「研究」「実践」との乖離をまずはみつめ、これまでの社会福祉学の限界と財産を受け継いでいく先に、あらためて人間（自然を含め）の立場にたった社会福祉学の可能性が見出されていくものと思います。

若手研究者・実践者の育成の場。それは互いの問題意識を交差する中で現実認識を高め、自己研鑽のみならずそうした現実を手を携えて向き合っている仲間との出会い・交流の場ともなるよう、いずれにしても受け身ではない人びとの主体的な参加によって場に命が吹き込まれるものと思います。親学会よりもさらに身近な相互の学び合いの場として活用されるよう、微力ではありますがお手伝いさせていただけたらと思っております。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

## 関東部会ホームページでの広報活動を通して

荒井 浩道（運営委員・ホームページ担当：駒澤大学）

関東部会ホームページ(<http://www.jsssw-kanto.jp/>)では、メインコンテンツである機関紙『社会福祉学評論』（電子ジャーナル）をはじめ、研究大会、奨励賞、ニュースレター、運営委員会、公開講座・講演会、博士論文公開審査、最終講義などの情報公開を行っています（図1）。『社会福祉学評論』に掲載された論文は、フルテキストで一般公開（無料）しています（図2）。



図1 関東部会HPトップページ



図2 機関紙『社会福祉学評論』

「1日あたりの訪問者数」は、ホームページが開設された当初は20名前後でしたが、コンテンツが充実してきた2011年頃から徐々に増加し、最近では150名前後で推移しています（図3）。人気コンテンツは、「機関紙『社会福祉学評論』（電子ジャーナル）」と「研究大会」です。

今後は、メールマガジン、Twitter、Facebookなどを活用することで、より活発な広報活動を展開していきたいと思っております。

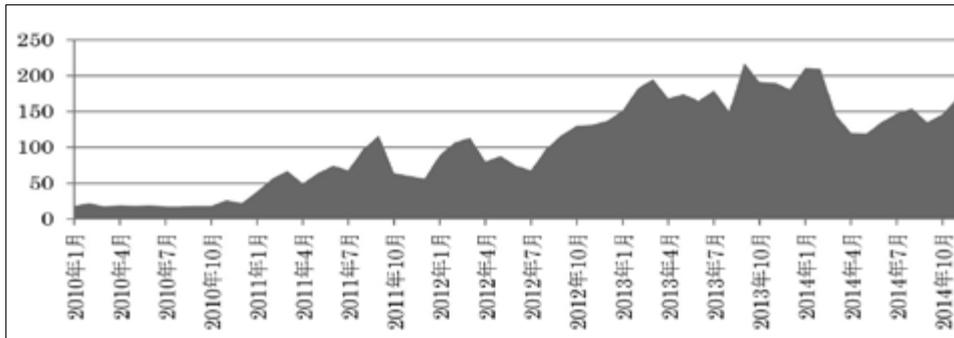


図3 1日あたりの平均訪問者数

なお、広報委員会ではホームページに掲載する公開講座・講演会、博士論文公開審査、最終講義の情報を随時募集しています。これらの情報をお持ちの方は、ご一報いただければ幸いです。ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

## 社会福祉学評論・編集事務局より

菱沼 幹男 (運営委員・事務局担当/編集事務局担当、日本社会事業大学)

これまで機関紙編集事務局を日本社会事業大学で担当させて頂いてきましたが、10月より東洋大学へ引き継ぐこととなりました。現在は移行期間として、査読中の論文については継続して編集事務局を担っております。これまで大島巖編集委員長のもと、大山早紀子氏、手束美和子氏との4名体制で業務を担い、できるかぎり迅速な対応を心がけてきましたが、至らない点もあったかと思えます。ここにお詫び申し上げますとともに、機関紙編集にあたっては機関紙編集委員の先生方や多くの査読協力者にご協力頂きましたことに、心から感謝申し上げます。

これまで編集事務局では、主に①作業のシステム化、②Ciiniへの登録、③規程の整備に取り組んできました。①作業のシステム化については、概ね2週間に1回の頻度で事務局会議を行い、投稿論文への対応を通して、受付、査読、編集、掲載までのプロセスにおいて必要な作業と文書の整備を行ってきました。大枠は親学会である日本社会福祉学会の機関誌編集作業プロセスを基盤にしなが、投稿者や査読者との連絡調整に必要な書類を整備しました。②Ciiniのシステム化については、社会的活用の促進を目指して取り組み、現在は論文タイトルと執筆者の検索が可能となっています。なお、CiNiiへの掲載にあたっては、電子ジャーナルだけでなく紙媒体での冊子が必要であったことから、若干の印刷製本を行い、福祉系大学へも寄贈しております。③規程の整備については、運営委員会での審議を経て、2013年9月より新たな「編集方針」「編集規程」「投稿・執筆要項」に基づいて進めております。

こうした取り組みの結果、投稿論文数は以前よりも増加傾向にあります。この度、編集事務局を東洋大学へ引き継ぐこととなりましたが、しばらくの間は作業プロセスを共有しながら、投稿者へ迷惑のかからないように進めていきたいと思えます。

本研究誌の役割は編集方針に明記されているように、大学院生等の社会福祉学研究に取り組み始めた方やさらなる研究報告の機会を求めている方の研究成果の発表の機会を増やすこと、そして関東から全国に発信していくことの使命にあります。これからも『社会福祉学評論』が会員の相互研鑽を図り、社会のニーズへ応えていく存在感のある機関紙となるよう引き続きどうぞよろしくお願い致します。